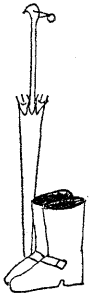
雨

徳丸吉彦



雨についてですって。楽しい、なつかしい思い出もありますが、なにしろ戦時中に小国民として育ったせいか、嫌な思い出の方が多いですね。かさが手に入らず、戦後大分たってもゴムの長靴を買ってもらえず、雨は本当に嫌でした。レインコートなんかは夢みたいな時期もありました。現在のように、さまざまな意匠のかさやコートが作られていれば学校に行くのも楽しかっただろうな、と思います。戦時中の疎開のときは、よくハダシで学校に行きました。もっとも、最近になって、ビルマのお寺の境内でハダシになることが多く、そのときは、なんの抵抗もないので助かっていますが。

雨といっても、かさをさす人の一寸したお行儀で、気分が楽しくも嫌にもなります。人が一人しか通れない露地を両方から人がやってきます。一人はかさをさし、もう一人はぬれたままです。道をゆずり合うときだけでも、持っている方がかさをさしかけてあげます。相手もにっこりします。国によっては、こういうことをすると、変な男だという目で見られます。

相合がさ、というのは芝居でも唄でもよくでてくる情緒的なもので、私も高校生の頃は、素敵な人と赤坂だの弁慶橋だのを一緒に歩いてみたいと思いました。そうしたら、最近はかさの勾配の急なもの（つまり半球に近い形）が作られました。これは、相合がさを拒否するような感じで、それなりに粋なものだと思います。

かさについてはまだあります。戦前に父がドイツみやげの折りたたみのかさをもっていて、それが欲しくてたまりませんでした。しかし、戦後は折りたたみのかさなどは、あたりまえのものになってしまいました。しかし、それにも国民性が関連しているように思います。日本の方は、キチンとたたまないとサックに入りません。しかし、すこし前から欧州で流行している西独のクニルプ社のものは、クチャクチャのままサックに入れます。その代り、サックは水を通さないしっかりしたものなので、満員電車のときは、すぐにサックに入れてし

まいます。どうもこの方が実際的だと思うんですが。

折りたたみはどこにでもあるものと思っていましたが、ソ連ではみかけませんでした。昨年でも売ってない、とのことでしたが、ソ連人の趣味に合わないのかもしれません。

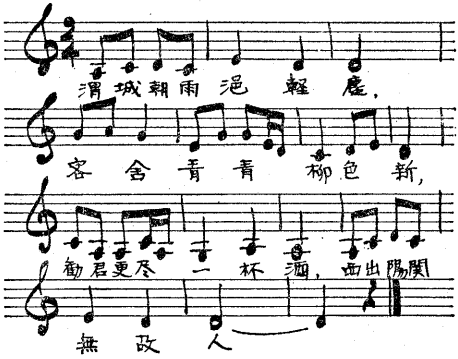
ソ連といえば、雨が降りだしたときに、自動車の中からワイパーをとり出してつけ、雨がやむとはずしてしまうのも、印象的でした。

雨は音楽の質にも影響を与えます。イタリアから安物ではありますがヴァイオリンを買ってきてもらったことがあります。五月のことでした。音が大きく、よく透るので、室内楽の仲間がびっくりしていました。しかし、夏には膠がはがれ、音質も音量も日本化して、だれも気にしてくれなくなりました。

義太夫の三味線（太棹）を弾く人には、梅雨どきは、駒の調子が悪くなるので困る季節です。太棹用の駒は、水牛の角で作りますが、重さを〇・一匁単位に調節するために、裏から鉛のかたまりが打ちこまれています。これが、この季節になると、ビンビンいったり、はずれたりするからです。どうも嫌な話ばかりですいません。雨がでてくる詩、というとすぐ思い出す詩があります。「陽関三畳」として愛唱されているものです。

渭城朝雨浥軽塵
客舎青青柳色新
勧君更尽一杯酒
西出陽関無故人

この詩の冒頭の印象が雨上がりのすがすがしさと受けとられたものですから、なにか、楽しい気分をもって読んでいました。しかし、ある時、中国の友だちが、お別れに歌おうとしたのに、悲しくて歌えなかったのをみて、初めて、その意味が実感としてわかりました。しばらくして、中国に戻った彼女から手紙とともに、旋律が送られてきました。その旋律を最後に記して、雨についての感想を閉じさせて下さい。

（談）

（お茶の水女子大学）